

誘惑

——或シナリオ——

芥川龍之介

青空文庫

1

天主教徒てんしゆきやうとの古曆ふるごよみの一枚、その上に見えるのはこう云う
文字である。――

御出生ごしゆつしょうらい来千六百三十四年。せばすちあん記し奉る。

二月。小

二十六日。さんたまりやの御つげの日。

二十七日。どみいご。

三月。大

五日。どみいご、ふらんしすこ。

十二日。……………

2

日本の南部の或山みち。大きい樟くすの木の枝を張った向うに洞ほら穴あの口が一つ見える。暫しばくたつてから木樵きこりが二人。この山みちを下つて来る。木樵りの一人は洞穴を指さし、もう一人に何か話しかける。それから二人とも十字を切り、はるかに洞穴を礼拝する。

3

この大きい樟こざえの木の梢しほ。尻しつ尾ぼの長い猿さるが一匹、或枝あざの上うへに坐すわつたまま、じつと遠い海を見守まもっている。海の上には帆前船ほまえせんが一艘そう。帆前船はこちらへ進んで来るらしい。

4

海を走っている帆前船が一艘。

5

この帆前船の内部。紅毛人の水夫が二人、檣ほぼしらの下に賽さいを転がしている。そのうちに勝負の争いを生じ、一人の水夫は飛び立つが早いか、もう一人の水夫の横腹へずぶりとナイフを突き立ててしまふ。大勢の水夫は二人のまわりへ四方八方から集まって来る。

6

仰あおむ向けになつた水夫の死に顔。突然その鼻の穴から尻しつぽつ尾の長い猿が一匹、顚あごの上に這はい出して来る。が、あたりを見まわしたと思ふと忽たちまち又鼻の穴の中へはいつてしまふ。

上から斜めに見おろした海面。急にどこか空中から水夫の死骸しがいが一つ落ちて来る。死骸は水けぶりの立った中に忽ち姿を失ってしまう。あとには唯浪ただなみの上に猿が一匹もがいているばかり。

海の向うに見える半島。

前の山みちにある樟の木の梢。猿はやはり熱心に海の上の帆前船を眺めている。が、やがて両手を挙げ、顔中に喜びを漲みなぎらせる。すると猿がもう一匹いつか同じ枝の上にゆらりと腰をおろしている。二匹の猿は手真似てまねをしながら、暫く何か話しつつづける。それから後に来た猿は長い尻尾を枝にまきつけ、ぶらりと宙に下つたまま、樟の木の枝や葉に遮られた向うを目の上の手をやって眺めはじめる。

前の洞穴の外部。芭蕉や竹の茂った外には何もそこに動いていない。そのうちにだんだん日の暮になる。すると洞穴の中から蝙蝠うもりが一匹ひらひらと空へ舞い上って行く。

二

この洞穴の内部。「さん・せばすちあん」がたった一人岩の壁の上に懸けた十字架の前に祈っている。「さん・せばすちあん」は黒い法服を着た、四十に近い日本人。火をともした一本の蠟ろうそ燭くは机くわだの水みづ瓶がめだのを照らしている。

12

蠟燭の火かげの落ちた岩の壁。そこには勿論もちろんはつきりと「さん・せばすちあん」の横顔も映っている。その横顔の頸くびすじを尻尾の長い猿の影が一つ静かに頭の上へ登りはじめる。続いて又同じ猿の影が一つ。

13

「さん・せばすちあん」の組み合せた両手。彼の両手はいつの間にか紅毛人のパイプを握っている。パイプは始めは火をつけてい

ない。が、見る見る空中へ煙草たばこの煙を挙げはじめ。……

14

前の洞穴の内部。「さん・せばすちあん」は急に立ち上り、パイプを岩の上へ投げつけてしまう。しかしパイプはあいかわらず不相変煙草の煙を立ち昇らせている。彼は驚きを示したまま、二度とパイプに近よらない。

15

岩の上に落ちたパイプ。パイプは徐ろおもむに酒を入れた「ふらすこ」の瓶に変つてしまう。のみならずその又「ふらすこ」の瓶も一きれの「花かすていら」に変つてしまう。最後にその「花かすていら」さえ今はもう食しよくもつ物ではない。そこには年の若い傾城けいせいが一人、艶なまめかしい膝ひざを崩したまま、斜たれめに誰かの顔を見上げている。

……

16

「さん・せばすちあん」の上半身かみはんしん。彼は急に十字を切る。それからほっとした表情を浮かべる。

前の洞穴の内部。「さん・せばすちあん」はもう一度十字架の
前に祈っている。そこへ大きい梟ふくろうが一羽さつとどこからか舞い下
って来ると、一煽あおぎに蠟燭の火を消してしまふ。が、一すじの月

18

尻尾の長い猿が二匹一本の蠟燭の下に蹲うずくまっている。どちらも
顔をしかめながら。

17

の光だけはかすかに十字架を照らしている。

19

岩の壁の上に懸けた十字架。十字架は又十字の格子こうしを嵌はめた長方形の窓に變りはじめる。長方形の窓の外は茅葺かやぶきの家が一つある風景。家のまわりには誰もいない。そのうちに家はおのずから窓の前へ近よりはじめる。同時に又家の内部も見えはじめる。そこには「さん・せばすちあん」に似た婆さんが一人片手に糸車をまわしながら、片手に実のなつた桜の枝を持ち、二三歳の子供を遊ばせている。子供も亦彼の子に違いない。が、家の内部は勿論、

彼等もやはり霧のように長方形の窓を突きぬけてしまふ。今度見えるのは家の後ろの畠^{はたけ}。畠には四十に近い女が一人せつせと穂麦を刈り干している。……………

20

長方形の窓を覗^{のぞ}いている「さん・せばすちあん」の上半身^{かみはんしん}。但し斜めに後ろを見せている。明るいのは窓の外ばかり。窓の外はもう畠^{はたけ}ではない。大勢の老若男女の頭が一面にそこに動いている。その又大勢の頭の上には十字架に懸った男女が三人高だかと両腕^{ひづ}を拡げている。まん中の十字架に懸った男は全然彼と変りは

ない。彼は窓の前を離れようとし、思わずよろよろと倒れかかる。

21

前の洞穴ほらあなの内部。「さん・せばすちあん」は十字架の下の岩の上へ倒れている。が、やっと顔を起し、月明りの落ちた十字架を見上げる。十字架はいつか初うい初ういしい降誕の釈迦しやかに変わつてしまふ。「さん・せばすちあん」は驚いたようにこう云う釈迦を見守つた後、急に又立ち上つて十字を切る。月の光の中をかすめる、大きい一羽の梟ふくろうの影。降誕の釈迦はもう一度もとの十字架に変わつ

てしまう。……………

22

前の山みち。月の光の落ちた山みちは黒いテエブルに変わってしまふ。テエブルの上にはトランプが一組。そこへ男の手が二つ現れ、静かにトランプを切った上、左右へ札を配りはじめる。

23

前の洞穴の内部。「さん・せばすちあん」は頭を垂れ、洞穴の

中を歩いている。すると彼の頭の上へ円光が一つかがやきはじめる。同時に又洞穴の中も徐ろおもむに明るくなりはじめ。彼はふところの奇蹟きせきに気がつき、洞穴のまん中に足を止める。始めは驚きの表情。それから徐ろに喜びの表情。彼は十字架の前にひれ伏し、もう一度熱心に祈りを捧げる。

24

「さん・せばすちあん」の右の耳。耳たぶの中には樹木が一本累々と円い実をみのらせている。耳の穴の中は花の咲いた草原くさはら。草は皆そよ風に動いている。

前の洞穴の内部。但し今度は外部に面している。円光を頂いた「さん・せばすちあん」は十字架の前から立ち上り、静かに洞穴の外へ歩いて行く。彼の姿の見えなくなつた後、十字架はおのずから岩の上へ落ちる。同時に又水みず瓶がめの中から猿が一匹おど躍り出し、怖こわ怖ごわ十字架に近づこうとする。それからすぐに又もう一匹。

この洞穴の外部。「さん・せばすちあん」は月の光の中に次第にこちらへ歩いて来る。彼の影は左には勿論、右にももう一つ落ちてゐる。しかもその又右の影は鏢つばの広い帽子をかぶり、長いマントルをまといつてゐる。彼はその上半身に殆ど洞穴の外を塞いだ時、ちよつと立ち止まつて空を見上げる。

27

星ばかり点々とかがやいた空。突然大きい分度器が一つ上から大股おおまたに下つて来る。それは次第に下るのに従い、やはり次第に股を締め、とうとう両脚を揃そろえたと思うと、徐ろに霞かすんで消えて

しまう。

28

広い暗やみの中に懸った幾つかの太陽。それ等の太陽のまわりには地球が又幾つもまわっている。

29

前の山みち。円光を頂いた「さん・せばすちあん」は二つの影を落したまま、静かに山みちを下って来る。それから樟くすの木の根

もとに佇み、^{たたず}じつと彼の足もとを見つめる。

30

斜めに上から見おろした山みち。山みちには月の光の中に石ころが一つ転がっている。石ころは次第に石斧^{せきふ}に変わり、それから又短剣に変わり、最後にピストルに変わってしまう。しかしそれももうピストルではない。いつか又もとのように唯^{ただ}の石ころに変わっている。

31

前の山みち。「さん・せばすちあん」は立ち止まったまま、やはり足もとを見つめている。影の二つあることも変りはない。それから今度は頭を挙げ、樟の木の幹を眺めはじめ。……

32

月の光を受けた樟の木の幹。荒あらしい木の皮に鎧よろわれた幹は何も始めは現していない。が、次第にその上に世界に君臨した神々の顔が一つずつ鮮かに浮んで来る。最後には受難の基キリスト督の顔。最後には？——いや、「最後には」ではない。それも見る見る四

つ折りにした東京××新聞に変わってしまう。

33

前の山みちの側面。鍰の広い帽子にマントルを着た影はおのずから真つすぐに立ち上る。^{もつと}尤も立ち上ってしまった時はもう唯の影ではない。山羊のように髯^{ひげ}を伸ばした、目の鋭い紅毛人の船長である。

34

この山みち。「さん・せばすちあん」は樟の木の下に船長と何か話している。彼の顔いろは重おもしろい。が、船長は唇くちびるに絶えず冷笑を浮かべている。彼等は暫しばらく話した後、一しよに横みちへはいつて行く。

35

海を見おろした岬の上。彼等はそこに佇たんだまま、何か熱心に話している。そのうちに船長はマントルの中から望遠鏡を一つ出し、「さん・せばすちあん」に「見ろ」と云う手真似てまねをする。彼はちよつとためらった後、望遠鏡に海の上を覗いて見る。彼等の

まわりの草木そうもくは勿論、「さん・せばすちあん」の法服は海風の
為にしつきりなしに揺らいでいる。が、船長のマントルは動いて
いない。

36

望遠鏡に映った第一の光景。何枚も画を懸けた部屋の中に紅毛
人の男女なんによが二人テエブルを中に話している。蠟燭ろうそくの光の落ち
たテエブルの上には酒杯さかずきやギタアや薔薇ばらの花など。そこへ又紅
毛人の男が一人突然この部屋の戸を押しあけ、剣を抜いてはいっ
て来る。もう一人の紅毛人の男も咄嗟とっさにテエブルを離れるが早い

か、劍を抜いて相手を迎えようとする。しかしもうその時には相手の劍を心臓に受け、仰向けあおむに床の上へ倒れてしまう。紅毛人の女は部屋の隅に飛びのき、両手に頬ほおを抑えたまま、じつとこの悲劇を眺めている。

37

望遠鏡に映った第二の光景。大きい書棚などの並んだ部屋の中に紅毛人の男が一人ぼんやりと机に向っている。電灯の光の落ちた机の上には書類や帳簿や雑誌など。そこへ紅毛人の子供が一人勢よく戸をあけてはいつて来る。紅毛人はこの子供を抱き、何度

も顔へ接吻した後、「あちらへ行け」と云う手真似をする。子供は素直に出て行ってしまふ。それから又紅毛人は机に向い、抽斗から何か取り出したと思うと、急に頭のまわりに煙を生じる。

38

望遠鏡に映った第三の光景。或露西亞人の半身像を据えた部屋の中に紅毛人の女が一人せつせとタイプライタアを叩いている。そこへ紅毛人の婆さんが一人静かに戸をあけて女に近より、一封の手紙を出しながら、「読んで見ろ」と云う手真似をする。女は電灯の光の中にこの手紙へ目を通すが早いか、烈しいヒステリイ

を起してしまふ。婆さんは呆氣あつけにとられたまま、あとずさりに戸口へ退いて行く。

39

望遠鏡に映つた第四の光景。表現派の面に似た部屋の中に紅毛人の男女なんによが二人テエブルを中に話している。不思議な光の落ちたテエブルの上には試験管や漏斗じょうごや吹皮ふいごなど。そこへ彼等よりも背の高い、紅毛人の男の人形が一つ無気味にもそつと戸を押しあけ、人工の花束を持つてはいつて来る。が、花束を渡さないうちに機械に故障を生じたと見え、突然男に飛びかかり、無造作に

床の上に押し倒してしまふ。紅毛人の女は部屋の隅に飛びのき、両手に頬ほおを抑えたまま、急にとめどなしに笑いはじめる。

40

望遠鏡に映つた第五の光景。今度も亦前の部屋と変りはない。

唯前ただと變つてゐるのは誰たれもそこそこにいないことである。そのうちに

突然部屋全体は凄まじい煙すすの中に爆発してしまふ。あとは唯一面

の焼野原ばかり。が、それも暫しばらくすると、一本の柳が川のほとり

に生えた、草の長い野原野原に變りはじめる。その又野原から舞い上

る、何羽とも知れない白鷺しらさぎの一群。……

前の岬の上。「さん・せばすちあん」は望遠鏡を持ち、何か船長と話している。船長はちよつと頭を振り、空の星を一つとつて見せる。「さん・せばすちあん」は身をすさらせ、慌あわてて十字を切ろうとする。が、今度は切れないらしい。船長は星を手の平にのせ、彼に「見ろ」と云う手真似をする。

星をのせた船長の手の平。星は徐ろおもむに石ころに変わり、石ころは又馬鈴薯じゃがいもに変わり、馬鈴薯は三度目に蝶に変わり、蝶は最後に極く小さい軍服姿のナポレオンに変わってしまう。ナポレオンは手の平のまん中に立ち、ちよつとあたりを眺めた後、くるりとこちらへ背中を向けると、手の平の外へ小便をする。

43

前の山みち。「さん・せばすちあん」は船長のあとからすすごごそこへ帰つて来る。船長はちよつと立ちどまり、丁度金かねの輪わでもはずすように「さん・せばすちあん」の円光をとつてしまう。

それから彼等は樟くすの木の下にもう一度何か話しはじめ。みちの上
に落ちた円光は徐ろに大きい懐中時計になる。時刻は二時三十
分。

44

この山みちのうねったあたり。但し今度は木や岩は勿もちろん論、山
みちに立った彼等自身も斜めに上から見おろしている。月の光の
中の風景はいつか無数の男女に満ちた近代のカツフエに変わってし
まう。彼等の後は楽器の森もつと。尤もまん中に立った彼等を始め、何なに
も彼かも鱗うろこのように細かい。

45

このカツフエの内部。「さん・せばすちあん」は大勢の踊り子達にとり囲まれたまま、当惑そうにあたりを眺めている。そこへ時々降つて来る花束。踊り子達は彼に酒をすすめたり、彼の頸くびにぶら下つたりする。が、顔をしかめた彼はどうすることも出来ないらしい。紅毛人の船長はこう云う彼の真後ろのぞに立ち、不相変あいかわらず冷笑を浮べた顔を丁度半分だけ覗のぞかせている。

46

前のカツフエの床。床の上には靴をはいた足が幾つも絶えず動いている。それ等の足は又いつの間にか馬の足や鶴の足や鹿の足に変わっている。

47

前のカツフエの隅。金きんぼたん鈕たんの服を着た黒人が一人大きい太鼓を打っている。この黒人も亦いつの間にか一本の樟の木に変わってしまう。

48

前の山みち。船長は腕を組んだまま、樟の木の根もとに気を失った「さん・せばすちあん」を見おろしている。それから彼を抱き起し、半ば彼を引きずるように向うの洞穴^{ほらあな}へ登って行く。

49

前の洞穴の内部。但し今度も外部に面している。月の光はもう落ちていない。が、彼等の帰って来た時にはおのずからあたりも薄明るくなっている。「さん・せばすちあん」は船長を捉え、も

う一度熱心に話しかける。船長はやはり冷笑したきり、何とも彼の言葉に答えないらしい。が、やっと二こと三ことしやべると、未だに薄暗い岩のかけを指さし、彼に「見ろ」と云う手真似をする。

50

洞穴の内部の隅。 顛髯あごひげのある死骸しがいが一つ岩の壁によりかかっている。

51

彼等の上半身^{かみはんしん}。「さん・せばすちあん」は驚きや恐れを示し、船長に何か話しかける。船長は一こと返事をする。「さん・せばすちあん」は身をすさらせ、慌てて十字を切ろうとする。が、今度も切ることは出来ない。

52

Judas ………

53

前の死骸——ユダの横顔。誰かの手はこの顔を捉え、マツサアジをするように顔を撫なでる。すると頭は透明になり、丁度一枚の解剖図のようにありありと脳髓を露あらわしてしまふ。脳髓は始めはぼんやりと三十枚の銀を映している。が、その上にいつの間にかそれぞれ嘲あざけりや憐あわれみを帯びた使徒たちの顔も映っている。のみならずそれ等の向うには家いえだの、湖だの、十字架だの、猥わい褻せつな形をした手だの、橄欖かんらんの枝だの、老人だの、——いろいろのものも映っているらしい。……………

前の洞穴の内部の隅。岩の壁によりかかった死骸は徐ろに若くなりはじめ、とうとう赤児に変わってしまう。しかしこの赤児の顛あごにも顛髻だけはちゃんと残っている。

55

赤児の死骸の足のうら。どちらの足のうらもまん中に一輪ずつ薔薇ばらの花を描いている。けれどもそれ等を見る見るうちに岩の上へ花びらを落してしまう。

彼等の上半身^{かみはんしん}。「さん・せばすちあん」は愈興^{いよいよ}奮^{ふん}し、何か又船長に話しかける。船長は何とも返事をしない。が、殆ど^{ほとん}嚴肅に「さん・せばすちあん」の顔を見つめている。

半ば帽子のかげになった、目の鋭い船長の顔。船長は徐ろに舌を出して見せる。舌の上にはスフィックスが一匹。

58

前の洞穴ほらあなの内部の隅。岩の壁によりかかった赤児の死骸しがいは次第に又変りはじめ、とうとうちゃんと肩車をした二匹の猿になつてしまふ。

59

前の洞穴の内部。船長は「さん・せばすちあん」に熱心に何か話しかけている。が、「さん・せばすちあん」は頭を垂れたまま、船長の言葉を聞かずにいるらしい。船長は急に彼の腕とらを捉え、洞

穴の外部を指さしながら、彼に「見ろ」と云う手真似てまねをする。

60

月の光を受けた山中の風景。この風景はおのずから「磯ぎんちやく」の充満した、嶮けわしい岩むらに変わってしまう。空中に漂う海く月の群らげ。しかしそれも消えてしまい、あとには小さい地球が一つ広い暗やみの中にまわっている。

61

広い暗の中にまわっている地球。地球はまわるのを緩めるのに従い、いつかオレンジに変っている。そこへナイフが一つ現れ、真二つにオレンジを截きってしまふ。白いオレンジの截断せつだんめん面は一本の磁針を現している。

62

彼等の上半身かみはんしん。「さん・せばすちあん」は船長にすぎたまま、じつと空中を見つめている。何か狂人に近い表情。船長はやはり冷笑したまま、睫毛まつげ一つ動かさない。のみならず又マントルの中から髑髏どくろを一つ出して見せる。

63

船長の手の上に載った鬮體。鬮體の目からは火取虫ひとりむしが一つひらひらと空中へ昇って行くゆ。それから又三つ、二つ、五つ。

64

前の洞穴の内部の空中。空中は前後左右に飛びかう無数の火取虫みに充ち満ちみている。

65

それ等の火取虫の一つ。火取虫は空中を飛んでいるうちに一羽の鷲わしに変わってしまう。

66

前の洞穴の内部。「さん・せばすちあん」はやはり船長にすぎり、いつか目をつぶっている。のみならず船長の腕を離れると、岩の上に倒れてしまう。しかし又上半身を起し、もう一度船長の顔を見上げる。

十字架をかざした「さん・せばすちあん」の手。

68

岩の上に倒れてしまった「さん・せばすちあん」の下半身^{しもはんしん}。
 彼の手は体を支えながら、偶然岩の上の十字架を捉える。始めは
 如何^{いか}にも怯^おず怯^おずと、それから又急にしつかりと。

67

69

後ろを向いた船長の上半身。船長は肩越しに何かを窺い、失望に満ちた苦笑を浮べる。それから静かに顛髯あごひげを撫なでる。

70

前の洞穴の内部。船長はさつさと洞穴を出、薄明るい山みちを下つて来る。従つて山みちの風景も次第に下へ移つて来る。船長の後ろからは猿が二匹。船長は樟くすの木の下へ来ると、ちよつと立ち止まつて帽をとり、誰か見えないものにお時宜じぎをする。

斜めに上から見おろした岩の上の「さん・せばすちあん」の顔。彼の顔は頬ほおの上へ徐ろに涙を流しはじめる、力のない朝日の光の

72

71

前の洞穴の内部。但し今度も外部に面している。しつかり十字架を握ったまま、岩の上に倒れている「さん・せばすちあん」。洞穴の外部は徐ろおもむに朝日の光を仄ほのめかせはじめる。

中に。

73

前の山みち。朝日の光の落ちた山みちはおのずから又もとのように黒いテエブルに変わってしまう。テエブルの左に並んでいるのはスパイドの一や画札えふだばかり。

74

朝日の光のさしこんだ部屋。主人は丁度戸をあけて誰たれかを送り

出したばかりである。この部屋の隅のテーブルの上には酒の罍びんや酒杯さかずきやトランプなど。主人はテーブルの前に坐すわり、巻煙草まきたばこに一本火をつける。それから大きい欠伸あくびをする。鬚髯すげを生やした主人の顔は紅毛人の船長と変りはない。

* * * * *

後記。「さん・せばすちあん」は伝説的色彩を帯びた唯一の日本の天主教徒てんしゆきやうとである。浦川和三郎うらかわわさぶろう氏著「日本に於ける公教会の復活」第十八章参照。

青空文庫情報

底本：「昭和文学全集 第1巻」小学館

1987（昭和62）年5月1日初版第1刷発行

底本の親本：「芥川龍之介全集 第八巻」岩波書店

1978（昭和53）年3月22日発行

初出：「改造 第九巻第四号」

1927（昭和2）年4月1日発行

入力：j.utiya

校正：かとうかおり

1999年1月26日公開

2016年2月25日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたってのは、ボランティアの皆さんです。

誘惑

——或シナリオ——

2020年 7月12日 初版

奥付

発行 青空文庫

著者 芥川龍之介

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>